

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

〔調査研究活動〕台湾調査報告

著者	松本 誠一
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	38
ページ	247-249
発行年	2003
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011364/

台湾調査報告

研究員 松本 誠 一

期 間 二〇〇三年一〇月六日～一三日

調査地 台湾 台北・台中・台南

二〇〇三年一〇月六日(月)から一三日(月)まで八日間にわたり、初めて台湾を訪れた。主な目的は、韓国と台湾との現在の関係、および台湾での韓人社会に関する情報を得ることである。韓国の仁川国際空港から大韓航空機で往復した。往路便は空席が多く、まだSARSの影響があるかと思ったが、復路便は満席であった。

台湾中正国際空港に着陸する前、眼下に見えた台湾地形の初印象は「池が多い」「耕地は小区画ながら方形」というもので、それ以外に韓国・日本ととくに異なる点は見出せなかった。

台湾滞在中は、故宮博物院・国立歴史博物館の見学以外は全面的に現地駐在、後藤武秀研究員の行き届いた手配と同行案内をいただき、短期間のわりには予期していた以上の成果を得られた。予想を上回る蒸し暑さの中、南国の陽射しを受けながら、よく外を歩き回った。私は歩くのは人より速い方であるが、後藤研究員はもっと速く、商店街の歩道の店ごとに段差が付いているのにつまずかないよう気をつけながら追いかけるものもなかなかの運動であった。久しく無かった「大汗をかく」という新陳代謝もして、身体にも良かったと思う。

六日、空港に後藤教授の出迎えを受け、投宿。予定の打合せを行い、東洋大学大学院同窓の林秀光氏を交えて会食。二〇数年ぶりの再会であった。七日はまず電話帳で訪問先を確認してから、雨の中、基隆路一段の新しいオフィスビルが建っている地区へ行き、駐台北韓国代表部、韓国観光公社台北支社を訪ね、予備的な情報を得る。次いで同じビル内の中華民国韓僑協会を訪ねる。これは台湾の韓人協会で、台湾韓人社会に関する基礎的な情報の提供を受けることができた。台湾韓人は台北のほか、北から基隆市、台中市、高雄市に集中していることを把握する。南京東路の韓国料理店、漢陽館で昼食をとる。

午後、台湾韓人社会に一番詳しいと教えられた人の事務所に何度も電話するが、本人と連絡が取れない。事務所に帰ってくるといので、そのまま、彼が住む基隆市に向う。事務所とのやりとりでは接触できそうであったが、残念ながら基隆に着いてからも本人との連絡が取れなかった。強い雨は降り止まず、港湾や少し遠出する史跡の見学は止め、市内の基隆夜市(市場)、廟などを見学して台北に戻る。夜、後藤研究員と共に、東洋大学大学院同期の輔仁大学社会学系・呉素倩教授、東呉大学社会学系・余巧芸教授と会食、助言を得る。

八日は中華民国韓僑協会の現会長が経営する旅行社を訪ね、取材する。会長は韓国政府の民主平和統一諮問委員の要職も兼ねている。長安東路一段の長寿韓国烤肉専門店で昼食をとる。一九七一年から開業の由。この店は他に八店舗支店を持っており手広く事業を展開している。青年路にある台北韓僑学校を訪問し、校長先生より説明を伺い、施設見学をすることができた。幼稚園と初等学校(小学校)があり、園児数は二二、一年生二一、

二年生六、三年生七、四年生三、五年生二、六年生一名、教員七名、講師九名が所属している。上級生になるにつれ人数が減っているのは、韓国に帰国して進学に備えるためという。一九六二年設立、一九七三年度から現在地で開校。SARSのため、五月八日から一六日まで休校した。

九日は国立政治大学を訪問し、韓国語文学系主任の王俊教授に面会、台湾の韓国関係の研究・教育の状況について伺う。学生数は一学年三〇名、教授七名で学部のみで大学院は無い。財団法人・中韓文化基金회가韓国との文化交流に力を注いでいる。次いで社会学系の関秉寅副教授を研究室に訪ねる。東アジア諸国の貿易組織の比較共同研究をされている。東京大学で経済学博士を取得した経済学系の黄紹恒教授とも通刺した。広い政治大学キャンパス内の案内は法律学系の江玉林助理教授のお世話になった。台中市にバスで移動。

一〇日、朝陽科技大学社会工作系の孫彰良助理教授（東洋大学で二〇〇三年三月に社会福祉学で学位取得）が自動車を出してくれ、台湾の中心に近い山中の日月潭国家風景区まで往復する。途中の景色、一九九九年九月二一日の台湾大地震からまる四年を経過して、震災の跡は「あれ」と指摘されても、慣れない目にはすぐに見つけられないほど、復興は著しい。台湾少数民族の家屋・文化を紹介するテーマパーク、九族文化村を見学。人類学を教育するものとして、台湾に来て「原住民」（九族文化村解説書の用語）にまったく触れないで帰るというのは、気持ちが治まらず、せめてワンポイントだけ、今回の台湾短期旅行でぜひ見学しておきたい場所のひとつであった。園内には九族に限らず、アラジン広場など、世界文化紹介の部分もあり、異文化理解を一私企業で大々的に産業化している様子は興

味深かった。

一日はまたバスで台南に移動して、一七世紀のオランダ砦跡などを見学する。オランダ支配とそれを破った鄭成功について、観光客に対してどのような表現が成されているかに関心があった。台南市内を歩いている内に、韓国人牧師の所属する教会をみつけ、電話をかけて少し話を伺う。飛行機で台北に戻る。

一二日、故宮博物院を見学。一番の目的は儒教式祭祀に用いられる祭器の名称と形に関する情報を得ることであった。韓国語の団体客も多く来ていた。ついで、国立歴史博物館にも回った。夜、林秀光氏、吳素倩教授、余巧芸教授、後藤研究員と会食。

一三日、午前中、韓国食品等売る店が集中している永和市中興街で、韓国商品を売る店何軒かを取材する。いずれも経営者は韓国と関係の深い中国人であった。

基隆から台南まで、台湾西部を縦貫しその光景をみた印象は、平野部の広いこと（生産力の高さを考えさせる）。道路沿いに檳榔売りのネオンつきボックスが至る所にあること。各所の街を歩き回って、看板に日本語が多用されていること。とくに「的」の字が来る所に平仮名の「の」がよく書かれており、意味不明になってしまっている場合があること。街中に韓国を思わせる看板はきわめて少ないが、台北駅構内の広告柱には韓国農水産物流通公社（<http://www.agrotrade.net/>）の広告が大きく掛けられている。「韓国 Kimchi」の広告には「千年的神秘」という語があり、「韓国味」の広告には梨の写真が使われている。台湾の韓国料理は、食べた範囲では辛みを抑えて作られていた。

詳細な報告は別稿を作成する。

台北・台南での調査と資料収集

研究員 野間 信 幸

期間 二〇〇三年一〇月一五日～二一日

調査地 台湾 台北・台南

台南市政府の重厚な役所建物が改装され、国立台湾文学館となって生まれ変わった。その開館式が一〇月一七日に行われ、柿落としとしての学会が翌一八日から一九日にかけて催された。学会は「張文環及其同時代作家学術研討会」と題され、行政院文化建設委員会のもと、国立台湾文学館・国立文化資産保存センター設立事務室の主催で挙行された。

当学会から参加招請状が届いたのは、SARS騒ぎが一段落した六月下旬のことであった。一〇年来張文環研究に携わっていることもあって、台湾で初の張文環を対象とする学会にはぜひとも参加したく思った。そのためには八月末までに論文と宣読稿（口頭発表用原稿）の提出が必要であった。ちょうど当研究所の学術フロンティア推進事業の共同研究協力者として考察していたテーマがあり、これをもとにして論文「張文環作品に表れたる漢文教養」を書き上げた。さらに宣読稿「張文環作品裡所表現的漢文教養」も別途作成し、論文と併せ提出した。

学会発表は、初日の一〇月一八日の冒頭に設定されていた。ゲストとし

て丁重な扱いを受けたことになる。コメンテータは、成功大学台文系の陳培豊教授が担当された。同氏とは初対面であったが、本件を機に交流を持つことになった。

学会は朝八時三〇分から夕方六時まで二日間行われたが、内容的にはまだ初期段階にあるような印象をもった。それは議論のための議論があったり、資料の扱いに隔靴搔痒の感が拭えなかったりしたことによる。学会の運営も、プログラムに変更があったり、提出論文を前もって入手し先読する者があって公平性に欠けていたり、問題となる点が見受けられた。それでも戸籍資料による調査報告が行われたり、公学校時代を過ごした小梅での住所が明らかになったり等、得るところも多かった。

個人的には旧知の研究者と会え、献本を受けたり語り合ったりでき、有意義な二日間であった。その研究者名を幾人か、次に述べておく。林瑞明（台湾文学館館長）、陳萬益（清華大学教授）、呂興昌（成功大学教授）、張恆豪（文芸評論家）、葉笛（詩人）、柳書琴（清華大学台湾文学研究所）、邱若山（靜宜大学教授）といった人たちである。

会場となった国立台湾文学館は、会議室やホールのほかに、立派な陳列室や展示室を持つており、休憩時間を利用して作家の原稿や初出の雑誌、初版本等の展示物を閲覧することができた。展示物のなかには、楊逵の「模範村」初稿、龍瑛宗の「蓮霧の庭」発禁ゲラ、戦後初期に楊逵訳で東萃書局から刊行された中国の小説「大鼻子的故事」（茅盾）、「微雪的早雪」（郁達夫）、「龍朱」（沈從文）などがあった。

なお、学会のポスターには張文環の学生服姿の写真が載っており、模造紙大に拡大されていたので、主催者側の柳書琴教授を煩わせ、二枚頂いて